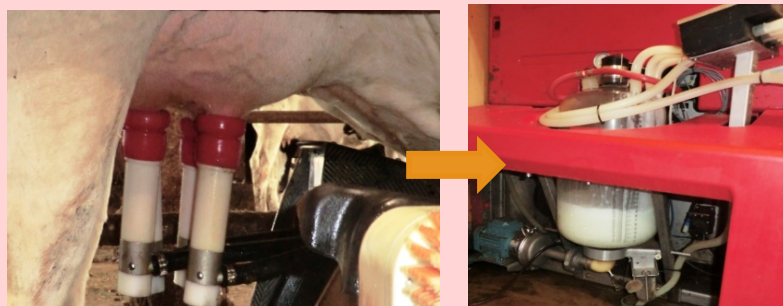


システム概要

- ① ICタグ(歩数計)により牛を個体識別し、搾乳状況等のチェックと牛の運動行動が把握できる。
- ② 搾乳ロボットによる搾乳作業の自動化(24時間対応)、個体別データ(体重、牛の行動、乳量、乳質等)の管理、ティートカップ(搾乳機の乳房に付ける吸引部分)の自動洗浄、個体毎に対応した自動給餌により、作業労力の軽減ができる。
- ③ 発情検知システムにより、牛の歩数データから発情時期を判定し、そのデータが自動的に転送され、状況確認ができる。
- ④ えさ押し機(ジュノ)により、昼夜を問わずえさ寄せを自動で実行できることから、作業労力の軽減ができる。

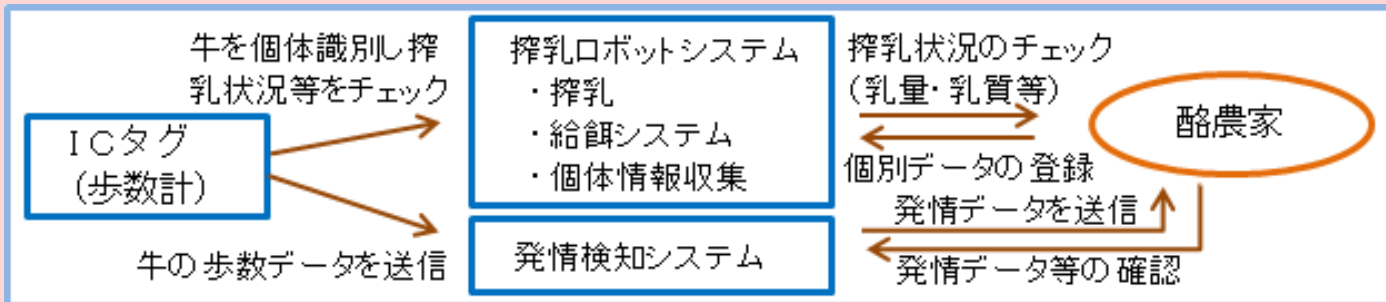
ロボットによる搾乳



えさ押し機



システムフロー図



導入経緯・背景

- 酪農は作業労働時間が他の農畜産物生産より多いことから作業効率化を図りたいと考えていた。既に導入していた酪農家への視察後、畜舎の建築(平成20年4月)と同時に搾乳ロボットを導入。

導入者コメント(効果・課題等)

- 搾乳牛1頭当たりの作業労働時間は、導入前より軽減された。
- 個体別データ(体重、牛の行動、乳量乳質等)の管理ができるようになった。
- 乳房炎に感染する牛が少なくなった。
- 体細胞数が減少し、乳量と乳質が共に安定した。
- えさ押し機導入により作業労働時間が軽減され、また、搾乳牛の夜の採食量も安定した。